「猿岩石」の映画に抜てき

大部屋出身の俳優 土平ドンペイさん(52)＝草津市㉓

はい上がる人 わたしの歩跡

≪俳優としての足がかりを見つけるため、妻と約束した猶予期間3年のうち、2年ほどが過ぎた。主にVシネマで活躍を続けるうち、願ってもないチャンスが巡ってきた≫

僕を使ってくれるようになった監督の一人（金澤克次監督）が「土平さんって、大阪出身でしたよね。全国公開する劇場映画を大阪で撮るんですよ。一つ面白い役があるんで、プロデューサーに会ってください」と声を掛けてくださって。「ありがとうございます」って会いに行くと、プロデューサーが僕のことをぱっと見て、「ちん○のタケシ、決まり！」。彼女ができないヘタレの役で、メジャー映画デビューを決めてくださったんです。

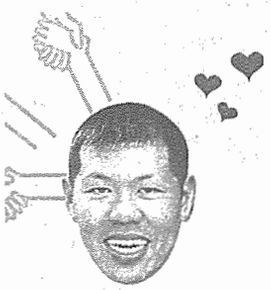
京都の大部屋時代のトレードマークだった、頭つるつると眉そりは、秘密兵器として取っておかなあかんって思っていて、当時は、普通の短髪で眉毛も生やしていましたね。

≪それでもプロデューサーの心をつかむ何かがあった≫

円谷映像が制作した青春映画「一生、遊んで暮らしたい」です。お笑いコンビ「猿岩石」と僕の他、もう1人の男4人が主演です。「猿岩石」だった有吉弘行さん(45)ら2人は、テレビ番組「進め！電波少年」でユーラシア大陸をヒッチハイクで横断して帰ってきて、人気絶頂の頃です。

大阪ロケでほぼ出ずっぱりで、セリフもたくさんあって。

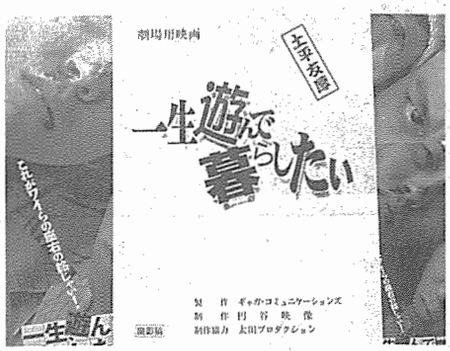
㊤映画「一生、遊んで暮らしたい」の写真集から入浴シーン。手前がドンペイさん
㊦ドンペイさんの役名「タケシ」＝いずれも本人提供



タケシ

3年経過「本気で勝負や」

映画「一生、遊んで暮らしたい」の台本。右上の「土平友厚」は本名



真冬の琵琶湖ですけど、撮影からの帰り道の真夜中に、対岸が明かりで奇麗なところで、セリフをたくさん覚えた記憶がありますね。

電話をかける悲しいシーンがあって、守山市のホテル「ラフォーレ琵琶湖」（当時）のカラオケボックスで夜中のアルバイト中、若い子に「ごめん、あそこの部屋で電話取ってくれへんか。俺、こんな芝居するから、このセリフ言うてくれ」って。電話のシーンの練習をして。

1998年1月に全国公開されます。32歳になる年です。「猿岩石」の取り上げ方がすごくて、公開日は朝の5時から新宿駅から新宿東映まで長蛇の列ができて。4人で、全国各地を舞台あいさつに回ったんですけど、「キャー」って大歓声が起こって。あれ、俺も人気者になったんかって勘違いしましたね。ワイドショーでも流されますし、その映画の本も出ますし。原作者の中場利一さん（代表作に「岸和田少年愚連隊」シリーズなど）が、この作品はおもろい俳優を発掘したって書いてくださって、中尾彬さんをあれだけ小馬鹿にする演技のできる俳優もいないって高評価でしたね。

嫁(桂子さん)に「どう思う。京都の大部屋俳優やっていた何にもない人間が、3年でメジャー映画にも出るようになって。やっぱり続けなあかん。続けたらもうちょっと行けるような気がするし」って聞いてみたら、「もうちょっとやったら」って言うてくれたんです。よーし、もう1回こっから本気で勝負や。

【編集局・大澤重人】

＝つづく、水曜掲載

「役になり切る努力は壮絶」

ドンペイさんがフェイスブックで発信し、寄せられたコメントに返事を書いています。読んだ方が「≪どんちゃん人生≫を垣間見る新聞欄、拝読が段々楽しみになってきました。役者になり切るためにはなんからでもヒントを探す。生前、川谷拓三さんが撮影現場で本当の痛みでないと演技ができないと本気で殴ってもらったと言うてましたが、役者さんって役になり切る努力は壮絶なものですね」との感想を寄せています。